

この言葉（5）

祖国のための戦争などありえない。

多和田葉子著『百年の散歩』（新潮社）を読んでいて、この一言にはっとした。これはベルリンにある10の通り、「カント通り」「カール・マルクス通り」「マルティン・ルター通り」「レナー・シンテニス通り」「ローザ・ルクセンブルク通り」「プーシキン並木通り」「リヒャルト・ワーグナー通り」「コルヴィッツ通り」「トゥホルスキー通り」「マヤコフスキーリング」の名前が章立てになっている作品である。

作者はこれらの通りを歩きながら100年という時空を散策する。彼女の想像力の限界は計り知ることができない。彼女は100年にわたる時代と空間を自由に飛翔し、立ち止まり、思考する。

上に挙げた言葉は「コルヴィッツ通り」の章に出てくる言葉だ。コルヴィッツ通りにある自然食料品店に入った作者は後ろから子供の幽霊に手を握られる。その子供に要求されるまま、いくつかの商品をカートに入れながら、彼女の想像世界は100年という空間を歩き来する。そして、この子供との会話から、彼が100年前のベルリンを生きていたのかもしれないという仮定にたどり着く。なぜなら、この少年はケーテ・コルヴィッツの夫（医者）を知っていたからだ。

ケーテ・コルヴィッツ（1867-1945）はドイツの版画家、彫刻家として貧しい人々の生活、労働を描いたほか、自分自身の母として、女性としての苦闘を数多くの作品に残した、とウィキペディアでは紹介されている。筆者はこれまで彼女の存在を知らなかったのだが、確かに『戦争』『母たち』などの作品に見られる女性、母としての苦悩には圧倒される。

彼女は第一次大戦で息子を、第二次大戦では孫を亡くした。そのことが彼女の人生、作品に多大な影響を与えた、と言われているが、コルヴィッツ通りで子供の幽霊と出会った作者が、ケーテと息子とのやりとりの場面に立ち会うことになる、というのも大変自然な成り行きのように思われる。幽霊と別れて公園に向かった作者は、そこで一人ベンチにすわって額に右手を当て、町の様子を眺めている老女を見つける。彼女がケーテであることには間違いない。「次男を戦場に送り出して死なせてしまったことを思い出しているのかもしれない」と作者は考える。

「長男には召集令状が来たが、次男はまだ年が若かったので戦場に行かなくてもすんだのだ。ところが本人が『祖国を守るために出征したい』と言い出し、甘えん坊だった息子がそんなことを言うので、コルヴィッツは頼もしさを感じ、喜びを隠せなかった。母親が誇りに感じてくれたことに、次男は敏感に反応し、父親にとめられても出征すると言い張った。母親も強く反対し続けるべきだったのだ。それも単に危ないからという理由で反対するのではなく、『祖国のための戦争などありえない』ことを教えてあげるべきだったのだ。隣の

国のフランスの同じ年の若者と銃で撃ち合って命を落とすなんて喜劇に仕立てるには悲しすぎるし、悲劇に仕立てるには滑稽すぎる。自分の軍の爆弾に当たって死んだ若者や、軍の食糧事情が悪くなって飢え死にした若者もいた。隣国がドイツを侵略しようとしているなどという噂は今ふりかえてみるとあまりに見え透いていてなぜ信じてしまったのか自分の愚かさが理解できない。」

これがケーテその人の述懐であったかどうかは不明だ。しかし、作者の前の老女は動かない。このまま動かずにいたら、身体が石になってしまうだろうと作者は考える。だんだん石になっていったら苦しみが和らいでいこう、このまま石になろう、と老女は思っているのかもしれない。ところが石になる前に彼女が槌で自分の肩を力いっぱいたたくと、石の下から人間の肌があらわれ、うめき声をあげて息子の亡骸を自分の体温で暖めようとする。ごうごうと泣き、こえがかれるとただ身体をふるわせつづけてこのまま彫刻になってしまいたいと願う。彫刻になってしまう以外に苦しみから逃れる道はないと。

作者によるケーテ・コルヴィッツの仕事と人生についてのこれほど深い理解はないだろう。しかしながら、同時に次のように自分自身を語る作者が存在することも真実である。

「芸術家は演出家であり、ほんの少し嘘つきだ。そういう嘘ばかりが気になって何も行動できないわたしは世の中の役に立たない人間なのだ。」私たち、矛盾する存在である人間は、模索しつつ揺れ動きながら、そのとき、その刻に選んだ道を進むほかない。

2018年1月10日 扇千恵記す